

私の一冊

歯科衛生学科 中村和美 先生

今西乃子著

『犬たちをおくる日:この命、灰になるために生まれてきたんじゃない』
(金の星社)

書店でこの1冊と出会った。表紙の写真が衝撃的だった。檻の向こうからこちらをじっと見つめる1匹の白い犬。その表情は何とも寂しげで哀しい目をしている。後ろ髪をひかれる思いだった。2度と現れるはずのない飼い主が迎えに来てくれるのを待ち続けているのだろう…。そして、本の帯には、「捨てられる命を一頭でも減らす社会へ。日本一の動物愛護センターを目指して、日々、奮闘する愛媛県動物愛護センター職員たちの日常を追いながら、命の尊さを考えるノンフィクション。」とあった。私は、即購入していた。

30年以上前、私がまだ小学生の頃、今はほとんど見かけないが、野良犬をよく見かけたものだ。私の家でも犬を飼っていたが、学校帰りに野良犬を前方に発見すると、野良犬に気づかれぬよう、くると身をかわして今来た道を早足で戻ったものだ。いつどこで擦り込まれたのかわからないが、野良犬＝追いかけて噛まれる、とても恐ろしい存在だったのだ。そして、野良犬がウロウロしていると、大人が保健所に電話して、保健所の人で野良犬を捕まえに来ると聞かされていた。保健所に連れて行かれた野良犬かその後どうなるのかは誰も言っていなかったし、私自身、考えたこともなかった。だから、殺処分されることを知ったのはずっと後のことだった。

今言えることは、野良犬たちは好きで野良になったわけではなかったということだ。最初は人間のペットとして可愛がられて迎えられたが、ある日突然、信頼していた大好きな飼い主に裏切られ、首輪を外され、家を追い出され、お腹をすかせて彷徨っていたのだ。さぞ不安で寂しく辛かっただろうと思う。だから、人間を見つけると人の温もりになんか少しでも近づきたくて、何か食べ物をもらいたくて近づいてきたのだと思う。私がほんの少し勇気を出していたら、野良犬のカラダを撫でてあげること位はできただろうに、その優しさすら持てなかった自分が非常に情けない。怖がって逃げたりしてごめんねと謝りたい。

今春、公開中の映画「ひまわりと子犬の7日間」が話題になっている。2007年、宮崎県の保健所で起きた実話である。動物保護管理所に收容された母犬とその子犬に命の期限が迫る中、收容されてもなお子犬を必死で守ろうと抵抗する母犬の強い母性に職員は心を動かされ、殺処分当日、ギリギリに奇跡的にも母子犬共に救われた心温まる物語だ。

平成 23 年度 174,742※ コレが何の数字かわかりますか？

平成 23 年度の1年間に殺処分された犬(43,606)・猫(131,136)の総数だ。(※環境省自然環境局 総務課 動物愛護管理室:統計資料「犬・猫の引取り及び負傷動物の収容状況」より)

飼い主の愛情をたっぷり受けて生涯を幸せに暮らすペットがいる一方、飼い主の安易な飼育放棄、引っ越すから飼えない、老犬だからもう飼えないといったさまざまな理由で自治体の収容施設に不幸な犬・猫が持ち込まれている。中には、飼い主が病気になり断腸の思いで手放さなければならなかったり、高齢の飼い主がお亡くなりになってしまった、などやむを得ない事情で収容施設に運ばれる犬・猫もいる。譲渡会で運良く新しい飼い主が見つかる犬・猫はほんのひと握りであり、今日もどこかの収容施設で、気づかれずに殺処分されている命があるという現実を教えてくれる本だ。成犬譲渡の場合、子犬に比べて新しい飼い主に会えるかどうかは難しく、多くが殺処分の対象となってしまう厳しい現実がある。

1匹でも多くの命を救い、人と動物が幸せに共生できる社会にしようと、動物愛護団体などが、譲渡会や動物とのふれあいイベントや飼い主のマナー向上のための講習会を開催している。こうした地道な啓蒙活動のおかげで、殺処分数が年々減少傾向を辿っているのではないかと思われる。ペットブームで単に可愛いから飼うといった一時の感情に流されず、人々のペットを飼うことに対する責任意識も少しずつ高まってきているのではないかと思う。犬・猫も人間同様、高齢化が進んでいる。寿命をまっとうする最期の時までお世話する覚悟と命を預かることに責任をもってほしい。

実際、殺処分はどのように行われるのだろうか？

殺処分の多くの方法は、二酸化炭素ガスによる窒息死だそうだ。狭いガス室に閉じ込められた犬たちは、まさか自分が死に直面しているとは思わないだろう。その業務にあたる職員も制御室のボタンひとつを押すだけで、直接犬たちに手を下さないとは言え、数分前まで無邪気にしていた犬たちの命を絶つのは、辛すぎる作業である。ガス室にガスが充満されると、犬たちは薄れゆく意識の中、ハアハアと舌を出して、酸素を求めてもがき苦しみ、折り重なるように死んでいく。現実決して安楽死ではなく、壮絶な最期だ。彼らは何も悪くない。何のために生まれてきたのだろうか？

「2009年2月19日、午後1時20分。

その日、わたし(著者)が殺したのは30頭の成犬、7匹の子犬、11匹の猫であった。

その死に顔は、人間をうらんでいるようには見えなかった。

彼らはきっと、最期のその瞬間まで飼い主が迎えに来ると信じて待っていたのだろう。

(序文抜粋)」

著者は現実に目を逸らさずに殺処分される犬たちの姿を最後まで見届けた様子を綴ってい

る。死亡確認がなされると、遺体はボタン操作で荷台に移され、摂氏 800 度の焼却炉に落とされ、犬たちは3時間かけて骨となり、その骨は粉々に砕かれて、土嚢に詰め込まれ、産業廃棄物として処理されるという。

人間も動物も命の重さに変わりはない。みな同じ命だ。心ない身勝手な飼い主により不幸な境遇となる犬・猫の数は決して少なくはない。命の重みと不幸な犬・猫を減らすために、自分にできることは何だろうと考えさせられる一冊だ。ぜひ、学生から教職員のみなさんまで広い年齢層の方々に読んでいただきたいと願う。特に学生のみなさんには、将来、親となり、子どもにペットを飼いたいとせがまれた時に、闇の部分の現実を包み隠さず教えてあげてほしい。残酷かもしれないが、動物を愛する心を育むには全てを知ることが必要と思えるからだ。

実は、我が家に、もしかしたら保健所行きになっていたかもしれない犬がいる。12 年前、近所周辺を見かけたことのない、首輪もつけていない1匹の子犬が彷徨っていた。「おいで!」と呼んだり、食べ物で釣れば近くまで来るものの、あと数歩という手前でサッと逃げてしまう。とても警戒心が強かった。私はすぐにピンときた。捨てられたに違いない…と。だとすれば、そう簡単に私を信用してもらえないはずもない。でも、このままでは誰かに保健所に通報されてしまうかもしれない、その前に絶対に守ってあげなければ!といろいろと作戦を実行したが、苦戦を強いられた。お腹もすいていたので、さすがに観念して、ようやくウチの家族になってくれた。生後半年程の女の子だった。異常なほどの早食いと物音がするたびにガタガタと体の震えが止まらなかった。よほど怖い目に遭ったのではないかと思う。幸いにも、当時、我が家に先住犬の男の子が1匹いた。彼はきっと、彼女に「ボクはいたずらをしてしょっちゅう怒られるけど、ここは散歩とゴハンは朝晩、住み心地は悪くないし、安心しなよ」と伝えてくれていたかもしれない。子犬は徐々に落ち着きと平静を取り戻し、心の傷が癒えたのかカラダの震えが止まったのは保護してから半年後だった。

新年度を迎えるこの時期は雑務に追われて、帰宅時間が遅くなる。彼女は私の帰宅がどんなに遅くなっても健気におとなしく待っていてくれる。そして、「もう寝てたよオ…。散歩？仕方ないなあ～、行ってあげてもいいよ」と言わんばかりに伸びをする。どっちが散歩してもらっているのかわからない。

今日の残業は早目に切り上げて、明るいうちに帰って散歩に連れて行こう!!